

国語

平成30年度 入学試験 問題

大阪夕陽丘学園高等学校

一 次の文章を読み、以下の各問いに答えなさい。

つい何日前か前、NHKで里山の番組を見た。人が自然と共に生きている琵琶湖西岸の美しい映像であった。^① ぼくは自然の中に吸い込まれていくような気持ちでじっと見入っていた。

そのうちにぼくはふと気づいた。^② 自然の中に吸い込まれるというこの表現は、里山については適切なものではないのではないかということに。

A ③ いつも言われているとおり、「里山」はけっして「自然」ではないからである。

もともとの自然の中に人間が入っていき、木を伐ったり、草を刈ったり、いろいろな働きかけをしていることによって生まれたもの、それが里山である。

④ もともとの自然は深くこんもりした林であっただろう。そこはあまり日もささず、うす暗くひんやりしていて、あまり快適な場所ではなかったにちがいない。少なくともそこに腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐという気になる場所ではなかったろう。

B 人が入って行って薪にする木を採り、小屋を建てる材木を伐り出し、あるいは林の緑を切り開いて小さな畑を作ったりというようなことをしていくと、林は少し明るくなり、やがて明るい場所を好む草や灌木も生えてくる。

その草木に花が咲けば蝶もやってくるし、花蜂たちもオトズれる。草木にはいろいろな虫がついて葉を食べる。そしてそのような虫たちを求めて小鳥たちも姿を見せる。きつとこんなふうにして林は少しずつ変わっていったのだろう。

I そこにはいわゆるエコトーン、すなわち自然の傾斜ができてくる。深い林から少し開けた明るい林、そして草地、畑、人家という傾斜が。

これが「里山」なのだとはぼくは思っている。C 里山は「里山」という「山」ではなく、人と自然が交錯するところ、基本的には人里なのである。

そこでは人と自然が共に生きているのではない。人は自然の中に入って行って、自然に何らかの働きかけをする。そこをただ歩くだけでも、それは働きかけである。人は地面に生えた草を踏み、何匹かの虫を払い落としたり踏みつぶしたりする。木も伐るであろうし、草も刈る。

しかし自然も負けていない。伐られた木は元の状態に戻ろうとして若枝を伸ばし、草はまた生えてくる。虫たちもせつせと子孫を残す。こうして人と自然のせめぎあいが続いていく。これが里山であり、人里である。

こうして生まれた里山は、もともとの深く暗い林とちがって、人間が親しみと安らぎをおぼえる場所になる。それが近年の里山賛美の源であることは疑いない。

II けれど里山を賛美するあまり、奇妙なこともおこっている。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというものも一つだ。

人が入って働きかけられることを止めれば、里山の自然はたちまちにして元へ戻っていく。それは人間の入って行きにくい、少なくともあまり快適ではない場所になってしまい、たちまちにして里山の「荒廃」がおこる。今や各地で、里山の荒廃が問題とされるに至っている。

その一方、里山の美への憧れはますます高まっている。里山の美しい映像は人々の心を打ってやまない。どうやら人々は、そこに自然の美を求めているように思える。今やつと、人工の美ではなく自然の美を求める気持ちになってきたのだろうか？ もしそうであるのなら、それは喜ばしいことであろう。

III 少し前に述べたとおり、里山はけっして自然そのものではない。それは自然と人間のせめぎあいの産物なのである。もしこのことを忘れると、人間は徹底した自然と徹底した人工とを求めることになりはしないだろうか？ それは何か現実的で自然なことになってしまいうような気がしてくる。

地球上で徹底した自然というのは、ジンソンとか噴火とか暴風、大雨などのように、人間にとって恐ろしいものが多い。人間はそれを求めてはいないし、美しいものとも思っていない。

一方、人間は人工物を徹底的に発達させ、その利便さを享受している。それはそれでよいのだし、それが人間の偉大さでもあるのだが、人々はそこに一抹の不安も感じている。その反応が自然礼賛の気持ちの源であることも否めない。どうやら人間は、何か両極端の間をさま迷っているのではないだろうか？

そんなふうにも思ってみると、里山というのは意味ぶかいものである。それは繰り返し言うとおりの、里山が自然と人間のせめぎあいの産物だからである。

人間は雨露をしのぎ、できるだけ快適に暮らすために、自然の一部を破壊して家を建て、町を作る。家や町の中に自然が入り込んできてほしくない。そこで人間は自分のまわりを管理する。子どもの遊び場までもきちんとしつらえ、人工の遊具をセツチする。都

庭は自分の思うようにしつらえ、道も交通も管理する。子どもの遊び場までもきちんとしつらえ、人工の遊具をセツチする。都

市は計画的に作られ、建物もできるだけ自動化する。こうして能う限り利便性に富み、^㉞安全な人工的環境ができあがる。けれどたえず報道されるとおり、^㉟そこにはさまざまなそして^㊱予見しがたい危険が絶えないのだ。

IV

人間と自然のせめぎあいの^㊲結果として生まれた里山は、これとはかなり異なっている。

それはそれほど利便性に富んだものではない。けれど^㊳そこでは何らかの安らぎを感じることができる。危険はないことはない。早い話がうっかりすれば蚊やときには蜂に^㊴サされる。子どもが木に登って遊んでいれば、落ちることもある。けれどその危険の多くは、人工的遊具の場合と違って予見できる。そういう危険を予見するトレーニングは、生きていく上で^㊵フカケツである。

自然を追い払ってすべてを人工的に管理することより、身のまわりに自然とのせめぎあいの場を残した人里に生きるほうが楽しいのではなかるうか。

(日高敏隆『セミたちと温暖化』による)

問一 ㉞部㊱「採」㊲「交錯」㊳「享受」㊴「否」㊵「予見」の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

問二 ㉞部㊱「オトズ」㊲「ジンシ」㊳「セツチ」㊴「サ」㊵「フカケツ」をそれぞれ漢字に直しなさい。

問三 ㉞部㊱「せめぎあい」㊲「産物」㊳「一抹の不安」㊴「雨露をしのぎ(ぐ)」の語句の意味として、最も適当なものをそれぞれ選択肢から選び、記号で答えなさい。

㉞ 「せめぎあい」
ア 互いに協力し合うこと。 イ 互いに対抗し合うこと。 ウ 互いに高め合うこと。
エ 互いに傷つけ合うこと。 オ 互いに責任を押し付け合うこと。

㊱ 「産物」
ア 自然界からの贈り物。 イ 自ら生産したもの。 ウ その土地の特産物。
エ 証拠として残るもの。 オ あることの結果として生まれるもの。

㊲ 「一抹の不安」
ア わずかな不安。 イ 大きな不安。 ウ 一番の不安。
エ 一時の不安。 オ 一種の不安。

㊳ 「雨露をしのぎ(ぐ)」
ア 雨宿りをする。 イ 梅雨に備える。 ウ 最低限の暮らしをする。
エ 室内で過ごす。 オ 雨水を貯めて使う。

問四 ㉞部㊱「安全」㊲「結果」の対義語をそれぞれ漢字で答えなさい。

問五 ㉞部㊱「A」㊲「C」に入れるのに最も適当な語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。
ア しかし イ だから ウ つまり エ たとえは オ なぜなら

問六 X・Yに入れるのに適当な打消の語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 否 イ 非 ウ 不 エ 未 オ 無
問七 ㉞部㊱に使われている修辞技法を次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 対句法 エ 直喩 オ 隠喩

問八 ㉞部㊱の後にはどのような語句が省略されていますか。本文中より五字以内で抜き出しなさい。

問九 ㉞部㊱「里山」はけっして『自然』ではない」と言えるのはなぜですか。本文中の語句を用い、解答欄に合うように十
五字程度で答えなさい。

問十 ㉞部㊱「もともとの自然」とはどのような場所だと考えられますか。それぞれ十字以内で二つ答えなさい。

問十一 ㉞部㊱「それ」の指示するものを、本文中の語句を用いて十字以内で答えなさい。

問十二 ㉞部㊱「人と自然のせめぎあい」とはどのようなことですか。具体例を挙げて説明している部分を本文中より抜き出し、
初めと終わりの五字ずつを答えなさい。なお、句読点も字数に含みます。

問十三 — 部⑦とありますが、「里山賛美の源」となっているのはどのようなことですか。本文中の語句を用いて三十程度で答えなさい。

問十四 — 部⑧とありますが、

- (1) 「奇妙なこと」とは、具体的にどのようなことですか。
(2) なぜそれが「奇妙」なのです。 「里山」「人」「自然」の三語を必ず用いて説明しなさい。

問十五 — 部⑨「このこと」の指示するものを、本文中の語句を用いて答えなさい。

問十六 — 部⑩「人間の偉大さ」とありますが、どのようなことを「偉大」だと言っていますか。解答欄に続くように本文中より抜き出し、初めと終わりの五字ずつを答えなさい。

問十七 — 部⑪「両極端」とありますが、ここでは何のことですか。本文中より十五字以内で抜き出しなさい。

問十八 — 部⑫⑬の「そこ」の指示するものを、それぞれ本文中より抜き出しなさい。

問十九 本文中に次の一文を入れるとしたら、**I**、**IV**のどこが最も適当ですか。記号で答えなさい。
でも果たしてこれで十分なのだろうか、ぼくはときどき考える。

問二十 本文について述べたものとして、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は先日、琵琶湖畔から里山をながめたとき、自然の中に吸い込まれていくような気持で見入ったが、この「自然の中に」という表現は、「里山」は決して「自然」ではないため、適切な表現ではないことに気づいた。

イ 筆者にとつての「里山」とは、ゆっくりと腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐという気になる場所であり、人が自然と共に生きていることを実感できる、琵琶湖西岸のような自然のことである。

ウ 里山では、人間による自然への一方的な支配が続いているが、いったんその関係がなくなれば、里山はどんどんその性質を失い、足の踏み入れがたい、あれはた里山となってその魅力をも失うことだろう。

エ 我々人間は、より快適な生活を追求し、自然の一部を破壊して家や街を作って徹底的な人工的環境を築いてきたが、このことの反動として現れたのが、純粋な自然として存在する里山への欲求であった。

オ 里山でも人工的な環境でも、あらゆる遊び場が絶対に安全だとは言いつれず、必ずどこかに危険があるが、里山にある危険は前もって見通せるものが多いのに対し、人工的な環境でのそれは見通せないものが多い。

二 以下の各問いに答えなさい。

問一 次の傍線部の品詞名をそれぞれ選択肢から選び、記号で答えなさい。

自然を①追ひ払って②すべてを人工的に管理すること③より、身のまわりに自然とのせめぎあいの場を残し④た人里に生きるほうが⑤楽しいのではなからうか。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|-----|---|----|
| ア | 動詞 | イ | 形容詞 | ウ | 形容動詞 | エ | 名詞 | オ | 副詞 |
| カ | 連体詞 | キ | 接続詞 | ク | 感動詞 | ケ | 助動詞 | コ | 助詞 |
- 問二 次の故事成語の意味として最も適当なものをそれぞれ選択肢から選び、記号で答えなさい。
- ① 矛盾 ② 蛇足 ③ 五十歩百歩 ④ 背水の陣 ⑤ 塞翁が馬

- | | | | |
|---|---------------------------|---|--------------------------|
| ア | 人生の幸不幸は予測できないこと。 | イ | 不必要なもの、余計な行為。 |
| ウ | 無くてはならない大切なもの。 | エ | 決死の覚悟で事に臨むこと。 |
| オ | 話のつじつまが合わないこと。 | カ | 多少の違いはあっても、本質的に変わりがないこと。 |
| キ | 危険を避けては、大きな利益や成功は得られないこと。 | | |
| ク | 当事者が争っているときに、第三者が利益を得ること。 | | |

問題は以上です。